

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19592240
 研究課題名（和文） 有床義歯患者の行動科学的研究とその応用
 －患者の解釈モデルは理解できるか？－
 研究課題名（英文） Behavioral science research and it's application for denture wearers
 Can doctor understand patients' interpretation for their illness?
 研究代表者
 田口 則宏（TAGUCHI NORIHIRO）
 広島大学・病院・講師
 研究者番号：30325196

研究成果の概要：

本研究では、高齢者や有床義歯装着者の行動特性を、医療者または学生の視点から検討し、これらから見出された高齢者や有床義歯装着者の特有の行動パターンの抽出とともに、学習者や現場の医療者の教育的なニーズ分析を行った。そしてそれらをもとに、患者の受療行動に様々な影響を与える解釈モデルの抽出に関わる教育プログラムの企画立案および実施を行った。その結果、有床義歯患者をはじめとする高齢者や、強い解釈モデルを有する患者に対しては、医療における”Science”と”Art”の両側面を十分ふまえた対応をとる必要があること、またその教育プログラムは臨場感の高い「体験」をベースにする必要があると考えられた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：歯学・補綴理工系歯学

キーワード：高齢者、有床義歯、医療コミュニケーション、行動科学、歯学教育

1. 研究開始当初の背景

歯科補綴は人々の健康・福祉の向上に貢献する重要な役割を担っており、健康科学としての捉え方が必要となる。その臨床の特徴は、咬合、咀嚼障害などの疾患や障害に対しての

「予防」と「治療」の側面と、歯などの喪失により損なわれた障害の回復を目指す「リハビリテーション」の側面を併せ持っていることであり、健康、長寿、QOLに直結する補綴歯科治療は、現代社会のニーズに即応する

重要な使命を有している。

このような背景の一方で、患者のもつ問題点（主訴、愁訴）は、情報化社会の進展に伴い多様化する傾向にあり、また患者のもつ疾患の物語（ナラティブ）も複雑化している。特に、有床義歯に問題を抱える患者の場合、問題の対象を口腔外へ取り出し、視覚的に観察し、五感で評価できるなど、患者自身が「物語」や「解釈モデル」を構築する上での材料には事欠かない。また、高齢者では認知能力にばらつきがある上、全身疾患との深い関わり、また生活環境の多様化など、医療者にとっては初診時に把握しておくべき事項は極めて多い。そのため、質の高い医療を提供するためには的確な医療面接を行い、人間関係の構築と共に正確な情報の収集が必要である。特に、このような有床義歯患者特有の問題に対応するためには、中立的および批判的な思考と、常に物事を客観的に判断する能力が求められ、有床義歯患者の行動科学を十分認識しておく必要がある。

一般にこのような能力は、長年の臨床経験や多くの義歯患者との関わりを通して培われてきたが、医療の質をコントロールし、常に安定した良質の医療を提供するためには、行動科学的エビデンスに基づいた医療コミュニケーションを実施する必要がある。しかしながら、これまで国内外において、有床義歯患者に特化した行動科学的エビデンスを検討した報告はほとんど見当たらない。

また、わが国における近年の急速な医学・歯科医学教育の変化の流れにおいて、医療者と患者間のコミュニケーションに焦点を当てた教育プログラムが多く開発実施されているものの、その内容は十分であるとは言えない。特に模擬患者（Simulated Patient）を用いて実際の診療現場をシミュレートしたトレーニングは、受講者の学習に対する

「気付き」を促せる点で多くの利点を有するため、利用価値は非常に高いものの、その活用は非常に少ない上、教育カリキュラムとしてシステム化がなされていない。

2. 研究の目的

本研究では、歯科医療従事者における医療現場での有床義歯患者との関わりについての基礎調査を行い、それらより得られたデータに基づいて高齢者とのコミュニケーションを促進する上での教育カリキュラムの開発、および実施までを視野に入れた検討を行った。

3. 研究の方法

（1）有床義歯患者とのコミュニケーションに関する基礎調査（広島県歯科医師会会員）

高齢者の占める割合の高い有床義歯患者は、一般に大学病院より地域の一般歯科診療所へ通院している傾向が高く、また純粋な患者の解釈モデルに関する検討を行うためには、一般歯科診療所における環境をベースとした調査が必要不可欠であると考えられる。そこで本調査は、広島県歯科医師会の全面的な協力の下、同会学術部との共同研究により同会会員に対する質問紙調査を実施した。2008年8月、広島県歯科医師会会員1,593名（男性1,454名、女性139名、平均年齢55.4歳）に対して郵送による無記名式質問紙調査を実施した。質問内容は、強い解釈モデルを有する高齢有床義歯患者に対する具体的対応を問う自由記載型の質問1項目、および高齢者とのコミュニケーションに関する10項目の質問（高齢者と接する頻度は？、高齢者とコミュニケーションをとる上で困難を感じた経験は？、またそれは具体的には？、高齢者とコミュニケーションをとる上で注意していることは？など）とした。

(2) 有床義歯患者とのコミュニケーションに関する基礎調査（歯学部生・研修歯科医）

2007年12月から2008年11月にかけて、平成19年度広島大学歯学部歯学科2、4、5年生、歯学部口腔保健学科2年生、および平成20年度同歯学科2年生、同口腔保健学科2年生、また両年度の広島大学病院（歯科領域）初期研修歯科医を対象に調査を実施した。調査は（1）同様の項目を採用した無記名式質問紙調査とした

(3) 医療コミュニケーショントレーニングの実施

(2)の調査で明らかになったとおり、学生や研修歯科医の多くは、医療コミュニケーションの学習をより実践的な環境で行うことを希望している。これは、学習行動の「気づき」を生み出し、自発的な学習を促進していく上でもとても重要なアプローチである。しかしながら、このような学習方略の提供は従来、個別や単発のケースではあっても、システム化されたカリキュラムとして組み立てられることはこれまでほとんどなされてこなかった。本節では、学生、研修歯科医など学習者のニーズ分析に基づき、個々の学習者を対象として、模擬患者との一対一でのコミュニケーショントレーニングを企画、実施した。トレーニングは一人につき45分設定し、臨場感を高めた環境において模擬患者との医療面接を行った後、録画されたビデオを評価者とともに供覧しながらフィードバックを行う、という設定とした。参加者には事後、無記名式質問紙調査を実施した。

(4) OSCE（客観的臨床能力試験）の実施

医療コミュニケーション教育が十分行われたかどうか、そしてその結果として、それらの能力が学習者に適切に備わったかどうか、については何らかの方法で評価を行う必要がある。最終的には実際の医療現場におい

て、患者さんの判断にゆだねるのが最も妥当性の高い方法であるのは間違いない。しかしながら教育カリキュラムの質を担保するためには、一定の客観性や信頼性を兼ね備えた評価方法を用いておく必要がある。そこで本研究では、過去10年前より本院卒後臨床研修プログラムで採用している客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：OSCE）を用いて、研修歯科医の備えている医療コミュニケーション能力の評価を行った。

(5) 介護施設における現場での研修

医療面接におけるカウンセリング能力の不足、また学生から研修歯科医に至る過程での本質的な高齢者とのかかわりの薄さを補うためには、大学病院内などにおける学習チャンスを如何に活かしても十分とは言えない。医療の対象である市民、とりわけ高齢者は大学病院に来ることはむしろまれで、通常は地域に生活し、地域の病院に通い、地域の中で完結していることのほうが多い。したがって、高齢者のことを学ぶためには高齢者のもとへ出かけて行き、直接高齢者の方々と会話し、様々な形で接し、時間を共有することにより、これまで見えてこなかった新たな視点が見つかる可能性が高いと考えられる。特に、近い将来、高度高齢社会を担うべき学生や研修歯科医は、できるだけ早い時点でこのような体験をするべきであり、そのための方略は様々な工夫が行われているところである。

本節では、広島大学病院歯科医師卒後臨床研修プログラムの研修協力施設となっている一施設に協力を依頼し、研修歯科医を短期間現場で研修させるトレーニングを実施し、事後にポートフォリオを記載させた。

4. 研究成果

(1) 有床義歯患者とのコミュニケーションに関する基礎調査

- ① 8割以上の会員がほぼ毎日、病院の内外に関わらず高齢者とコミュニケーションをとっていた。
- ② 約8割の会員が、高齢者とのコミュニケーションをとる上で困難を感じた経験があると回答していたが、それがストレスになると回答していたのは3割強であった。
- ③ 例示したようなケースを、9割以上の会員が経験したことがあると回答していた。
- ④ 補綴を専門領域と回答していた会員は、そうでない会員に比較して、高齢者とコミュニケーションをとる上で、視覚的、聴覚的情報などにより理解を促進させる傾向であった。
- ⑤ 強い解釈モデルを有する高齢有床義歯患者に対する対応は、客観的根拠に基づき必要なことを実施するといった対応と、患者の希望や意思を尊重する対応の二種に大きく分類された。

(2) 有床義歯患者とのコミュニケーションに関する基礎調査(歯学部生・研修歯科医)

- ① 高齢者とコミュニケーションをとる頻度は、低学年から高学年、研修歯科医と年齢が上がるにつれ頻度が増える傾向を示したが、高齢者とコミュニケーションをとることが「めったにない」と回答した割合は、低学年(歯学科および口腔保健学科の2年生)で約57.2%、高学年(歯学科の4、5年生)で約38.5%存在した。
- ② 「高齢者とコミュニケーションをとるのがストレスに感じるか」との問いに対しては、低学年で30.8%のものが「ストレスを感じる」と回答していたのに対して、高学年では9.6%、研修歯科医では9.5%と減少し、学年が上がるにつれ高齢者とのコミュニケーションに対して意識の変化が見られ

た。

- ③ 歯学部の高学年、高学年および研修歯科医の全てのグループにおいて、高齢者とのコミュニケーション能力を学習するために望ましい方法は、「介護施設など現場での体験」であるという回答が他と比較して最も多かった。

(3) 医療コミュニケーショントレーニングの実施

- ① 本トレーニングは大半の研修歯科医から有益であったとの評価を得、彼らのニーズにマッチしていた。
- ② ビデオによる振り返りは、学習者にストレスを与えるものの、自分自身の行動の振り返りを促し、個々の行動変容に影響を与える傾向にあった。
- ③ トレーニングの環境整備など臨場感を高めることにより教育効果が高まった。
- ④ 本トレーニングを導入する場合は、学習者のレディネスに配慮する必要がある。

(4) OSCE(客観的臨床能力試験)の実施

医療コミュニケーション能力の評価を客観的に実施するうえで、OSCEにおける医療コミュニケーション課題の設置はきわめて有効であることが示唆された。本OSCEは試験実施時期が臨床研修開始直後の4月であり、これまでほとんど臨床に携わっていない研修歯科医にとって大半の課題が卒前実習以来であった。そもそも本試験の目的は形成的評価に属するため、アウトカムを求めるわけではなく、研修開始時点での自らの能力を教員とともに確認し、これから始まる一年間の研修の方向性を知ることであった。そのため、フィードバックに十分な時間を割き、非常に教育効果の高い臨床能力試験となったと考えられる。

医療面接課題では、参加協力いただいた模擬患者の年齢から高齢者の設定は不可能で

あった。そのためシナリオ内に解釈モデルを明確にし、患者の訴え、不安、本当に伝えたいことを聞き取れるか、という点に重点を置き評価を行った。その結果、医療者としての態度や、技能としてのコミュニケーション能力はスコア3レベル（表現可能・精確）であったが、感情面への配慮などに関する「カウンセリング能力」はスコアが低い傾向であった。このような点は、一年間の臨床研修における様々な学習チャンスを活かして、能力の改善をしていかねばならない領域であると考えられる。

（5）介護施設における現場での研修

本研修は現場の施設の多大なる協力があったからこそ成しえたものであるが、そのような環境でしか得ることのできない様々な出来事を、各参加者は感じたようであった。高齢者との医療コミュニケーションを学習する、という目的だけにとどまらず、高齢者について、または人生について、そして医療のあり方について、など、普段の大学病院での研修では考える機会の少ない、しかしながらきわめて本質的な問題点に対して考える「きっかけ」を与えてくれた点で、本研修は非常に意義深かったと考えられる。このような体験を通して、自分自身を振り返り、医療者として今後あるべき姿を自ら模索し、すべての医療者が具備すべき能力である Self-directed learning を促進させていくためには、このような機会をさらに増やすことが必要であり、またできるならばより多くの研修歯科医に体験させる必要がある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①田口則宏、海外の医学・歯学教育関連会議参加報告 欧州医学教育学会年次総

会、日本歯科医学教育学会雑誌、査読あり、24、2008、102-103.

- ②田口則宏、小川哲次、田中良治、小原 勝、笹原妃佐子、キャリアデザインからみた歯科医師臨床研修のアウトカム評価、日本歯科医学教育学会雑誌、査読あり、24、182 - 189、2008.

- ③Taguchi N.、Ogawa T. and Sasahara H.、Japanese dental trainees perceptions of educational environment measurement in postgraduate training.、Medical Teacher 30、査読あり、2008、e189-e193.

- ④田口則宏、小川哲次、田中良治、笹原妃佐子、歯科医師臨床研修における新たな教育環境評価法の可能性、日本歯科医学教育学会雑誌、査読あり、23、2007、46-53. [学会発表]（計8件）

- ①田口則宏、田中良治、小原 勝、小川哲次、土井伸浩、片山荘太郎、瀬川和司、松本紀幸、中村 衛、梶井正文、山野亮介、宮村健一、一瀬智生、西野 宏、津島隆司、三反田 孝、高齢者とのコミュニケーション 広島県歯科医師会会員の視点から、第11回日本コミュニケーション学会中国四国支部大会・第3回医療コミュニケーション教育研究セミナー、2008年11月30日、広島

- ②小川哲次、田口則宏、田中良治、小原 勝、コミュニケーション教育と学習スタイル、第11回日本コミュニケーション学会中国四国支部大会・第3回医療コミュニケーション教育研究セミナー、2008年11月30日、広島

- ③田口則宏、田中良治、小原 勝、小川哲次、土井伸浩、片山荘太郎、瀬川和司、松本紀幸、中村 衛、梶井正文、山野亮介、宮村健一、一瀬智生、西野 宏、津

島隆司、三反田 孝、広島県歯科医師会
会員における高齢者とのコミュニケーション、第 47 回広島県歯科医学会・第
92 回広島大学歯学会・日本歯科技工学
会中国・四国支部第 3 回学術大会、2008
年 10 月 19 日、広島

- ④田口則宏、田中良治、小原 勝、小川哲
次、土井伸浩、片山荘太郎、瀬川和司、
松本紀幸、中村 衛、梶井正文、山野亮
介、宮村健一、一瀬智生、西野 宏、津
島隆司、三反田 孝、高齢者に対する医
療面接、総合歯科医療に関する学術研究
セミナー2008、2008 年 8 月 3 日、広島
- ⑤田口則宏、カリキュラムストラクチャー
のあり方 「シンポジウムⅡ これから
の医療コミュニケーション教育の目標
設定とカリキュラムストラクチャー」、
第 27 回日本歯科医学教育学会 総会・
学術大会、2008 年 7 月 11 日、東京
- ⑥小川哲次、田口則宏、田中良治、小原 勝、
佐々木友枝、臨床研修歯科医のための医
療面接トレーニングについて、第 27 回
日本歯科医学教育学会総会・学術大会、
2008 年 7 月 11 日、東京
- ⑦佐々木友枝、前田純子、田口則宏、小川
哲次、模擬患者 (SP) 活動における満足
度調査、第 27 回日本歯科医学教育学会
総会・学術大会、2008 年 7 月 11 日、東
京
- ⑧田口則宏、義歯にまつわるコミュニケー
ション、第 10 回日本コミュニケーション
学会中国四国支部大会・第 2 回医療コ
ミュニケーション教育研究セミナー、
2007 年 12 月 15 日、広島

[図書] (計 1 件)

- ①伊藤孝訓、小川哲次、大石美佳、川上智
史、河野文昭、木尾哲朗、小池一喜、小
出 武、米谷裕之、笹野高嗣、寶田 貴、

田口則宏、寺中敏夫、樋口勝規、古内 壽、
本間善郎、町野 守、宮城 敦、森 啓、
山根源之、クインテッセンス出版、患者
ニーズにマッチした歯科医療面接の実
際、2008、80 - 87, 164 - 167.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 則宏 (TAGUCHI NORIHIRO)
広島大学・病院・講師
研究者番号：30325196

(2) 研究分担者

小川 哲次 (OGAWA TETSUJI)
広島大学・病院・教授
研究者番号：50112206

田中 良治 (TANAKA YOSHIHARU)
広島大学・病院・助教
研究者番号：50304431

河村 誠 (KAWAMURA MAKOTO)
広島大学・病院・講師
研究者番号：10136096

笹原 妃佐子 (SASAHARA HISAKO)
広島大学・病院・助教
研究者番号：40144844

(3) 連携研究者